

## A. Gehlen の哲学的人間学

平野具男

「我々は何者であるか、いずこより来たり、いずこへ去るのか」という問は神話の時代より今に至るまで止んだためしはないが、これを「哲学的」に問うたのはようやく近世人文科学以来のことである。すなわち「人間」は動物の一種であるという自覚とともに世界に自己を位置づける作業が始められた。哲学とは「感性に触発された理性」の学であると見抜きながらも「絶対精神」に現を抜かしたヘーゲル以降、フォイエールバッハの自然学的反省を棚上げにしたマルクスは、人間の個人と社会とを一丸にして物質の循環過程にとりこむ弁証法的唯物論を提起する。やがて 20 世紀の世界大戦間に、新石器時代一万年来、我々は今ほど自己についての無知を思い知ったことはない、そして《哲学的人間学》こそがこれに答えよう、と M. シェーラーはいった。アルノルト・ゲーレンの原点もまさしくここにある。人間は「欠陥動物」(ヘルダー)であり、世界と自己の間に開口する「空隙」を埋めるものは、言語文化一般を含む「制度」であって、人間はこれを生存の必須条件とする。ゲーレンにとって人間の「自然=身体」とは直ちに生命=身体であるから、意識存在も含めた生命の原理を無生物質の法則に還元して憚らない唯物論哲学は不倶戴天の敵手たることを免れない。一方の実存主義は、自己の現実存在に不安をいだきながら、外部に経験される多様な存在を顧みようとしない一種自閉的な人間主義に留まる限り、これと一線を画するほかはなかった。「哲学」とは総合科学であるが、生命も意識も物質に同一視して平然たる産業技術社会の弊害は、精神の存在をも射程に入れた生命=行為論によって克服されねばならないという。しかしそのための実践的「制度」を論ずるにあたり「社会学者」へと変貌をとげるゲーレンに対して左翼知識人から繰り出された批判の鋒先によって、次第に袋小路へ追い込まれていった。かの旧石器時代原始人が陥った「食人風習」にも比すべき攻撃的破壊衝動を秘めながら、ひたすらに快楽を追求する現代都市文明の只中で、「禁欲」をもって自己に対座せよといい、物質生活の歯止めなき繁栄も、いよいよ緊張を強いられる管理体制の過剰も、ともに人間が露呈する欠陥性にほかならないと主張すれば、孤立はまず免れないからである。時代の「狂奔」に巻き込まれる「貪欲にして優柔」な企業人の火事場泥棒も、人類の何百万年におよぶ系統発生史的「負担」が合理的産業文明によって一切「免除」され得ると錯覚する知識人の極楽蜻蛉も、はたして——ギムナジウム時代よりショーペンハウエルを愛読したという——この人間学者の節儉の気風をベシミスムと断定すればすでに事は了るか了らないか、決着はいまだについていないと言うべきだろう。これについては本論発表当日、時を失って十分言及できなかったが、今なお全集刊行中のゲーレンの著作もその全貌をとらえたわけではないことを付言しつつ、今後の研究をさらに進めてゆきたいと考える。